

溶連菌感染症

まゆずみこどもクリニック

黛 博 雄 先生

溶血性連鎖球菌という細菌が原因で起こる病気を総称して「溶連菌感染症」といいます。小児がかかりやすいのはA群β溶血性連鎖球菌で、感染の仕方には飛沫感染と皮膚からの接触感染があります。溶連菌の潜伏期はおおよそ2～5日です。主に2～10歳ごろに多く、成人には少ないといわれています。季節的には、12～3月に一番多いといわれますが一年中見られます。また、溶連菌は一度だけではなく繰り返しかかることがあります。

主な症状は次のようなものですが、すべて出るわけではありません。

- (1) 咽頭炎・扁桃腺炎・・・発熱、のどの痛みや赤み、扁桃腺に白いものがつく
- (2) イチゴ舌・・・舌の表面が、イチゴの表面のようになることがある
- (3) 発疹・・・痒みを伴う小さい赤い発疹が多数出現する

診断は迅速診断キット(のどを綿棒でぬぐい、検体を採取)を用い、数分で溶連菌かどうか判定可能です。

治療には抗生物質が有効です。溶連菌感染そのものは、普通の抗生物質を2～3日飲めば、すぐ治りますが、急性腎炎・リウマチ熱などの合併症を防ぐため10～14日間、抗生物質を飲む必要があります。症状がなくなっても合併症を防ぐためや再発予防のために処方された抗生物質は途中でやめず、すべて飲みきってください。また、合併症の有無を見るために2～3週間後に検尿を行い異常がないことを確かめる必要があります。

学校や保育園、幼稚園には、抗生物質を1～2日服用すれば人にうつさなくなるので発熱が治まり元気があれば登校・登園が可能になります。家族内で感染することも多く見られるので溶連菌と診断された場合、兄弟姉妹で同じような症状があつたら早めに受診して検査を受けてください。抗生剤を内服しても熱が2日以上続くときやのどの痛みが強く水分がとれないときはもう一度診察を受けてください。また、経過中に尿が赤い(血尿)、尿量が少ない、顔が腫れぼったいなどの症状が出た場合は、合併症を起こしているかもしれないので早めの受診を心掛けてください。